白居易の詩における「雪月花」の表現の成立について

菅野禮行

前言

「雪月花」という漢語は、四季における代表的な自然美を象徴的に總括したことばとして、一般に理解されている。[1]

江戸末期における武谷仙麗撰『俳諧雪月花』（弘化四年刊）を見ると、凡例に、「諸家四季の得意なる吟を記す」（圏點筆者）と斷って、その内容は、當時の俳人たちの「賞美厚く耳に殘りし高點の吟を」（凡例）集めている。この書名にいう雪月花は、四季の名吟の集の意であって、いわゆる雪、月、花を個々に直接的に詠じた俳諧の集の謂ではない。[2]

また、中國においても、雪、月、花の取り合わせが、詩や畫の素材として取り上げられている。明の劉世儒の『劉石湖梅譜』（和刻本書畫集成、第五輯所收）は、梅に關する畫や詩を收載した書物である。その畫の中には、梅花に雪を配し、或は月を配するものが同じ一葉の版になっていたりもする。詩の方での一例を示せば、「雪梅題贈東園魏公子」と題して、「海雲繚繞雪初晴、萬壑飛泉凍不鳴、唯有孤山梅共月、不分今古自縱横」の七絶を收める。これらは、古人の雪月花に對する格別の情趣的傾向を示すに足る例であろう。

そこで、本稿では、この「雪月花」という漢語の取り合わせが、中國においては、いかにして成立を見たかという點に關して、いささか卑見を述べてみたい。

一

そもそも、「雪月花」を一まとまりに取り合わせて意圖的に表現した最初の人は、中國においては、恐らくは白居易ではなかったかと思われる。作者が、五十七歳のとき[3]の「寄殷協律」と題する七律の頷聯にそれが見られる。

五歳優游同過日　一朝消散似浮雲
琴詩酒伴皆拋我　雪月花時最憶君
幾度聽雞歌白日　亦曾騎馬詠紅裙
吳娘暮雨蕭蕭曲　自別江南更不聞

五歳優游　同に日を過すも　一朝消散して　浮雲に似たり
琴詩酒の伴は　皆我を拋つれば　雪月花の時　最も君を憶ふ
幾度か雞を聽いて　白日を歌ひ　また曾て馬に騎りて　紅裙を詠ず
吳娘暮雨　蕭蕭の曲　江南に別れてより　更に聞かず

（汪立名本、『白香山詩集』〈以下同〉後集卷八）

この作品には、題下に「多敍江南舊遊」との自注がある。白居易は、長慶二年（八二二）、五十一歳のときに杭州刺史に任ぜられ、次いで蘇州刺史となり、五十五歳でその任を解かれるまで、その間、太子左庶子として東都に分司する一時期があったものの、足かけ五年間、主として江南にいた。その間の交友を懐かしんで殷氏に寄せたのがこの詩である。その領聯に、江南にいた當時、琴詩酒をともに嗜んだ友人たちは、今や自分から遠ざかってしまい、雪月花などの折りふしの好時節には殊に君のことが思い出される――と歌う。

「琴詩酒伴」の解釋については、白居易は「北窓三友」（太和八年〈八三四〉六十三歳）の詩の中で、「欣然得三友、三友者爲誰、琴罷輒擧酒、酒罷輒吟詩」（後集卷三）と歌い、琴、詩、酒を三友と稱しているので、ここでも琴詩酒それ自體を「伴」としているとも理解できる。しかし、そのように解釋すると、「琴詩酒伴皆拋我」の句は、「私にとっての友人である琴詩酒は、皆私を顧みなくなってしまった」の意となってしまう。やはりここは、琴詩酒をともに嗜んだ友人たちの意味に解釋しておきたい。(4)

また、このあとに續く「雪月花」というのは、單なる冬の雪、秋の月、春の花という並列的な意味ばかりではない。それは、「琴詩酒」との對偶關係から「雪月花」の表現をとってはいるが、四季折り折りの美しい自然的景物を雪月花に代表させ、そうした自然の好時節が訪れる度ごとに、かつて同じ時期に行樂を共にした殷氏のことが、ことさらに思い出される――と歌い續けたものである。

なお、この聯は、我が國の『千載佳句』や『和漢朗詠集』などの諸書に引用されている。

二

ところで、この「雪月花」なる取り合わせは、白居易の作品中、この詩において突如として成立したわけではない。

汪立名本『白香山詩集』の中で、「雪」とか、「月」とか、「花」とかいう語が、極めて近接して歌われる例を、作品の成立年代順に掲げると、（詩句に付した「　」は、詩句を省略しない作品であることを示す。以下同じ。）

1 苑花似雪同隨輦　宮月如眉伴直廬
　苑花雪の似きとき　隨輦を同じくし
　宮月眉の如きとき　直廬に伴たり
（「答馬侍御見贈」卷一四）37～40歳

2 獨出門前望野田　月明蕎麥花如雪
　獨り門前に出でて　野田を望めば
　月明らかに蕎麥　花雪の如し
（「村夜」卷一四）43歳

3 蕊拆金英菊　花飄雪片蘆　波紅日斜沒　沙白月平鋪
　蕊は拆く　金英の菊
　花は飄る　雪片の蘆
　波紅にして　日斜めに沒し
　沙白くして　月平らかに鋪く
（「東南行一百韻云云」卷一六）46歳

4 院柳煙婀娜　簷花雪霏微　看山倚前戶　待月闌東扉
　院柳　煙婀娜として
　簷花　雪霏微たり
　山を看て　前戶に倚り
　月を待ちて　東扉を闌く
（「嚴十八郎中在郡日、云云、宴遊其間、頗有幽致、云云」後集卷一）53歳

5 「不獨君嗟我亦嗟　獨り君の嗟くのみならず我もまた嗟く

西風北雪殺南花。　西風北雪　南花を殺らせるを
不知月夜魂歸處　知らず月夜　魂歸るの處
鸚鵡洲頭第幾家」　鸚鵡洲頭　第幾家ぞ
（「和劉郎中傷鄂姬」後集巻八）57歳

6看雪尋花翫風月。　雪を看花を尋ね　風月を翫ぶ
洛陽城裏七年間　洛陽城裏　七年間
（「間吟」後集巻四）64歳

などが擧げられる。この中、1～5までは、花を雪にたとえるなど、修辞的な表現、もしくは單なる並列的表現と見なしてよい。ところが6の例は、洛陽での七年間を回顧して、雪、花、風月などの語に託して、四季折り折りの行樂のさまを、「看雪尋花翫風月」という凝縮した表現で、象徴的に歌うものである。

ところで、「雪」「月」「花」という語を樂府や詩の中で、極めて近接した位置に詠み込むことは、すでに六朝の作品に、次のような先例がある。（詩句番號は、通し番號。）

7濟流月鏡　濟流に　月は鏡り
鹿毳霜鮮　鹿毳　霜に鮮かなり
甘露降和　甘露　降和し
花雪表年　花雪　年を表す
（舞曲歌辭「帝圖頌」『古詩紀』〈以下同〉宋巻一一）

8樓上徘徊月。　樓上　徘徊の月
臆中愁思人　臆中　愁思の人
照雪光偏冷　雪を照らして　光偏へに冷やかに
臨花色轉春　花に臨んで　色轉た春なり
星流時入暈　星流れて　時に暈に入り
桂長欲侵輪　桂長びて　輪を侵さんと欲す
（庾肩吾「和徐主簿望月」梁巻一七）

9銜霜當路發　霜を銜んで　路に當たって發き
映雪擬寒開　雪に映って　寒を擬りて開く
枝横郤月觀　枝は横たふ　郤月の觀
花繞凌風臺　花は繞る　凌風の臺
（何遜「詠早梅」梁巻二〇）

10柳絮亟如絲　柳絮　しばしば絲の如く
梅花屢成雪。　梅花　しばしば雪を成す
月落桂陰遠　月落ちて　桂陰遠く
風起萱條結　風起こって　萱條結ぶ
（荀濟「贈陰梁州」梁巻二七）

11子月泉心動　子月　泉心動き
陽爻地氣舒　陽爻　地氣舒ぶ
雪花深數尺　雪花　深さ數尺
牀牀厚尺餘　冰牀　厚さ尺餘
（庾信「寒園即目」北周巻五）

以上の諸例の中、7・8・10の例は、それぞれ「雪」「月」「花」に配するに、「霜」や「甘露」、「星」や「桂」、また「絮」「桂」「風」等の語をも取り合わせた表現と見るべきであろう。また、9の例の「郤月觀」は觀名、11の例の「子月」は陰暦十一月の異名であるから、これらの「月」は、自然的景物である月そのものを直接指していないことはいうまでもない。しかし、雪、花など他の語との響きを考慮して、あえて「月」という文字の使用を試みたものと考えられる。

いずれにせよ、これらの六朝詩における諸例は、先に掲げた白居易

における「寄殷協律」や6の例とは異質である。やはり白居易は、「雪月花」をひとまとめに取り合わせて、意圖的に象徴的な表現を試みたものであり、このような文學的表現の試みは、白居易によって初めてなされたものと思われる。

三

それでは、白居易の詩において「雪月花」の取り合わせが、自然美の象徴的表現として可能になったのは、なぜであろうか。なぜ蘭とか柏などの語が用いられなかったのだろうか。蘭とか柏などの語は、雪、月、花に比較して、四季の中でも或る特定の季節に結びつけにくいからでもあろうが、事情はそればかりにあるのでもなさそうである。

そこで、「雪」とか、「月」とか、「花」などを主題とした作品、もしくは、それらの語が詩題の中にうかがわれる作品について、その題を『古詩紀』と、『全唐詩』（杜甫については『杜詩詳註』、李白については王琦本『李太白文集』、白居易については汪立名本『白香山詩集』を用いた。）とによって調査してみた。詩題に注意した理由は、作者が雪、月、花を主題として、或はそれに卽して詠もうとする意圖が、それによって明確にうかがえる場合が多いであろうと考えたからである。しばらく見ていく中に、或る事實に氣がついた。それは、詩題の中に、「雪」「月」「花」などの語があると、それらの語の上に「玩（翫）」の字が用いられる傾向が多いということである。

ここでいう「玩」とは、張協の「雜詩十首（其三）」（『文選』卷二九所收）に「金風扇素節、丹霞啓陰期、騰雲似涌煙、密雨如散絲、寒花發黃采、秋草含綠滋、閑居玩〈五臣作翫〉萬物、離羣戀所思（以下六句略）」とあるごとく、自然の風物を良き對象として賞玩する意である。

詩題中、「玩雪」「玩月」「玩花」というような熟語にならないまでも、修飾語などを除くと、窮極的には「玩雪」「玩月」「玩花」となってしまうような例が甚だ多い。

そこで、前掲の二つの總集の中、白居易に至るまでの作品の中から、自然の風物を「玩」とするものの詩題を次に掲げる。しかし、詩題に「賞」の字を含むもの、すなわち「賞牡丹」などの場合は、「賞」は、賞玩の意であるので[5]、「玩」と同樣に考えてこれを加えた。

まず、隋末までの例を次に示す。

12 翫月城西門廨中。（鮑照、宋卷八）
13 玩漢水。（簡文帝、梁卷五）
14 翫庭柳。〈玉臺作詠柳〉（沈約、梁卷一一）
15 北寺寅上人房、望遠岫翫前池。（王筠、梁卷二三）
16 翫雪。（王衡、隋卷七）

これらの詩題は、後人の手によって改編されている可能性も考えられるので、資料を全面的には信用できない。そこで、詩中における例を『文選』によって檢するに、自然の風物を賞玩する例として、前に掲げた張協の詩のほか、江淹の「雜體詩三十首」（『文選』卷三一）の中の「高談玩四時、索居慕疇侶」（張黃門〈協〉苦雨）などの句が擧げられる。しかし、『文選索引』（斯波六郎編）『玉臺新詠索引』（小尾郊一、高志眞夫編）によって見るに、「玩」の字が、雪、月、花にかかる例は檢し得ない。とにかく、現存資料によってみる限り、以上のような例があり、すでに、「玩月」「玩雪」の詩題が現れている。

次に、初唐以後、白居易に至る「玩（翫）～」の詩題例を掲げる。

17 遊後湖賞蓮花。（嗣主璟、『全唐詩』卷八）

18 人日玩花、應制。（劉憲、同巻七一）
19 玩初月。（駱賓王、同巻七九）
20 奉和洛陽玩雪、應制。（沈佺期、同巻九六）
21 和元舍人萬頃、臨池玩月、云云。（同、同巻九七）
22 東谿玩月。（王維、同巻一二七〈一作王昌齢詩〉）
23 同從弟銷南齋、玩月、云云。（王昌齢、同巻一四〇）
24 自金陵泝流、過白壁山、翫月達天門、寄句容王主簿。（李白、『李太白文集』巻一三）
25 翫月金陵城西、孫楚酒樓、云云。（同、同巻一八）
26 玩螢火。（韋應物、全唐詩巻一九三）
27 翫月、呈漢中王。（杜甫、『杜詩詳註』巻一一）
28 十六夜翫月。（同、同巻二〇）
29 禁闥玩雪、寄薛左丞。（錢起、『全唐詩』巻二三八）
30 和朝郎中揚子、玩雪寄山陰嚴維。（皇甫冉、同巻二五〇）
31 奉和苑舍人宿直曉、玩新池、寄南省友。（沈東美、同巻二五五）
32 翫春、因寄馮衮二補闕、戲呈李益。（盧綸、同巻二七八）
33 翫花、與衛象同醉。（司空曙、同巻二九三）
34 同于汝錫、賞白牡丹。（王建、同巻二九九）
35 賞牡丹。（同、同巻二九九）
36 和元郎中從八月十三至十五夜、翫月。五首。（同、同巻三〇一）
37 秋暮、憶中秋夜與王璠侍御賞月、因愴遠離、聊以奉寄。（鮑防、同巻三〇七）
38 仲月賞花。（韋同則、同巻三〇九）
39 四川使宅有韋令公、時孔雀存焉。暇日與諸公同玩座中、云云。（武元衡、同巻三一六）
40 津梁寺採新茶、與幕中諸公、遍賞芳香尤異、因題四韻兼呈陸郎中。（同、同巻三一六）
41 和武相錦樓玩月、得濃字。（柳公綽、同巻三一八）
42 和武相公中秋錦樓玩月、得蒼字。（張正一、同巻三一八）
43 奉和武相公中秋錦樓玩月、得來字。（徐放、同巻三一八）
44 和武相公中秋錦樓玩月。（崔備、同巻三一八）
45 褒城驛池塘、翫月。（羊士諤、同巻三三二）
46 玩槿花。（同、同巻三三二）
47 東渡早梅、一樹歲華、如雪、酣賞成詠。（同、同巻三三二）
48 王起居獨遊青龍寺、玩紅葉、因寄。（同、同巻三三二）
49 玩月、喜張十八員外以王六秘書至。（韓愈、同巻三四二）
50 玩月、並序。（歐陽詹、同巻三四九）
51 太原和嚴長官八月十五夜西山童子上方玩月、寄中丞少尹。（同、同巻三四九）
52 和樂天讌李周美中丞宅、池上賞櫻桃花。（劉禹錫、同巻三五五）
53 和郴州楊侍郎玩郡齋紫薇花、十四韻。（同、同巻三五五）
54 八月十五日夜、桃源玩月。（同、同巻三五六）
55 八月十五日夜、玩月。（同、同巻三五七）
56 八月十五日夜、半雲開、然後玩月、因書一時之景、寄呈樂天。（同、同巻三五八）
57 和令狐相公玩白菊。（同、同巻三六二）
58 奉和中書崔舍人八月十五夜玩月、二十韻。（同、同巻三六二）
59 賞牡丹。（同、同巻三六五）
60 思黯南墅、賞牡丹。（同、同巻三六五）
61 城內花園、頗曾遊玩。云云。書實以答令狐相公見譏。（同、同巻三

六五）

62泛江玩月。十二韻。（元稹、同卷四〇六）

63酬樂天八月十五夜禁中獨直、玩月見寄。（同、同卷四一二）

64八月十四日夜、玩月。（同、同卷四二三）

65東園翫菊。（白居易、『白香山詩集』卷六）

66翫松竹。（同、同卷一一）

67和錢員外早多翫禁中新菊。（同、同卷一二）

68華陽觀中、八月十五夜、招友翫月。（同、同卷一三）

69八月十五日夜、聞崔大員外翰林獨直、對酒翫月、因懷禁中清景、偶題是詩。（同、同卷一四）

70與沈陽二舍人閣老、同食敕賜櫻桃、翫物感恩、因成十四韻。（同、同卷一九）

71江亭翫春。（同、同卷一九）

72翫新庭樹、因詠所懷。（同、同後集卷一）

73翫止水。（同、同卷二）

74對火翫雪。（同、同卷二）

75翫迎春花、贈楊郎中。（同、同卷八）

76和汴州令狐相公新於郡內、栽竹百竿、拆壁開軒、旦夕對翫、偶題七言五韻。（同、同卷九）

77答夢得八月十五日夜、翫月見寄。（同、同卷一二）

78翫半開花、贈皇甫郎中。（同、同卷一二）

79八月十五日夜、同諸客翫月。（同、同卷一三）

80宅西有流水、牆下構小樓、臨翫之時、頗有幽趣、因命歌酒、聊以自娛、獨醉獨吟、偶題五絶。（同、同卷一四）

81對新家醞、翫自種花。（同、同卷一七）

以上の諸例によっても、六朝時代に比較して、唐代に入ってからは、「玩～」（「翫～」「賞～」の例も含めて、以下「玩～」と記す）の詩題の例が増加する傾向が顯著に見られる。

これらの中、年代的に初唐に相當する部分は、17～21であるが、この中には唱和した作品もあるので、少くとも二人以上の集團の場で同題で歌われたことをそれらは示しているから、「玩～」の作品數の實際はもっと多く存在していたであろう。17は、後湖に遊んで蓮花を賞玩した作品で、この「賞」は前述したように、意味としては、「玩」と同様に考えられる。從ってこれは、「玩花」の例である。18・20は、「玩雪」、19・21は、「玩月」の例で、初唐に至って、「玩雪」「玩月」「玩花」の例が出揃ったことになる。22以後の盛盛、中唐の例の豐富さに比較すれば、この初唐の例は少いといえるが、しかし、隋末までの部分に比較すれば、質的にも量的にも大變な變化の相を示している。

初唐におけるこのような詩的主題の特徴的な風潮は、22以降の例にみるように、盛唐以後においても繼承され、ことに「玩月」「玩花」の例においてその傾向は顯著であった。

以上の詩題例を全體として整理してみると、詩題に「玩」の字を含む七十例の中、「玩雪」「玩月」「玩花」の例が五十例以上の多きに達する。換言すれば、「玩」の語が雪、月、花以外の語にかかる例は極めて少ない。ただし、白居易の作品中、73、74、77、78、79、80、81は、いずれも、彼が「雪月花時最憶君」と歌った五十七歳の時よりは、後の作品である。

いずれにせよ、白居易を含めて、それまでの唐代詩人達の間に、「雪」「月」「花」が賞玩すべき詩的對象として、重要な位置を占めて

いたことは、事實であろう。白居易五十七歳以後の數例の作品をかりに除外したとしても、その間の事情は變わらないとみてよい。

唐代の詩人達が、「雪」「月」「花」に對して、このように特別な詩的關心を濃厚に持ち續けて來たということは、「雪」「月」「花」が、單に美的な自然的景物を意味することばとして、個々に用いられるばかりではなく、次第に、自然の美的情趣を象徴的に現す代表的な一まとまりのことばとして考えられるに至るであろうことを示している。

ここに、白居易が「雪」「月」「花」を取り合わせて、「雪月花」と表現し得た一因があるのではあるまいか。白居易は、その鋭敏な詩人的感覺で、「雪」「月」「花」が賞玩すべき詩的題材であることを把握し、それをひとまとまりの取り合わせとして表現することで、そこに自然美を總括する象徴的な意味を新しく付加せしめたのであったと思われる。

四

しかし、優れた詩人的資質に惠まれた人は、白居易のみとは限らない。たとえば、當時、劉禹錫とか元稹などがいて、しかも彼等は白居易と親交を結び、『元白唱和因繼集』『劉白唱和集』などの作品を殘している間柄である。しかるに、なぜ白居易の作品だけに「雪月花」の表現が成立したのであろうか。現存六十卷の『元氏長慶集』は、もと百卷であったという。[6] そのことを思うと、元稹にも「雪月花」の表現があったものが、現在その部分の作品が亡佚しているのではないかと疑われなくもない。劉禹錫など他の詩人についても、そのような疑いは可能性として殘るであろう。

しかしながら、「雪月花」の表現が、白居易だけにされているのは、彼自身の文學に内在するいくつかの要因が考えられるように思えるのである。白居易が主體的な意圖に基づいて、「雪月花」の表現を成立せしめたと考えられる點について、以下、述べてみたい。

その第一は、前に掲げた「玩～」の詩題數を、主要な作者別に比較してみると、それぞれの作品數の寡多を考慮してもなお、白居易の例が多い傾向にあることである。主要作者を、便宜上、李白・杜甫・劉禹錫・元稹として比較してみると、

李白	翫月	二例
杜甫	翫月	二例
劉禹錫	玩花	六例（賞花を含む）
	玩月	四例
元稹	玩月	三例

となるのに比して、

白居易	翫雪	一例
	玩（翫）月	四例
	翫花	五例

という結果になって、「玩～」の詩題が、白居易の場合は劉禹錫と同數であり、杜甫・李白に比しては壓倒的に多いのである。

さらに、他の詩人には「玩雪」の例がないのに、白居易にのみ「玩（翫）雪」の例があり、「玩月」「玩花」の例を加えて、三つとも揃っている。また、詩題のみならず、白居易が陶淵明の「五柳先生傳」にならって書いた「醉吟先生傳」の中には、「良辰美景、或雪朝月夕、好事者相通、必爲之先拂酒罍、次開篋詩、酒既酣、乃自援琴」（『白氏文集』卷七十〈馬元調本〉）とある。美景とは、同じく白居易の有名な詩句に、「花下忘歸因美景」（「酬哥舒大見贈」『同』卷一三）とあるよう

に、花の美しい風景を指す。ここにも、「雪月花」の時に、琴詩酒を樂しむ意識がみられる。

これらのことは、白居易が他の詩人に比較して、「雪」「月」「花」という詩的題材に、特別の關心を寄せていたことを意味している。

第二には、「雪」「月」「花」のどれもが、四季の中で、人々に最も親しまれやすく美しい自然的景物の代表的存在であることを、そしてそれが、無常感を催す風物であることを、白居易が特に認識していたであろうと思われることである。

人々は、雪にたわむれ、月をめで、花の下に集うものである。しかし、そうした人間の營みは、季節の推移と共に消滅してしまうものである。

白居易が、吏部尚書であった同年の親友、崔羣のために書いた祭文の中に、かつての交遊を回顧して、「竹寺雪夜、杏園花朝、杜曲春晩、潘亭月高、前對青山、後携濁醪」（「祭崔相國文」『白氏文集』巻七十）と述べ、さらに「兩心相期、三逕之間、優遊攜手、而終老焉。嗚呼易失者時、難忱者天、既奪我志、又殲我賢」（同）と嘆いている。崔羣が沒した前年には、愛兒阿崔が三歳で夭沒し、無二の親友元稹もまた急逝していた。崔羣とはせめて優遊し手を攜えて、老を終えようと期していたのに、時の流れは無情にもその友さえもさらに奪ってしまったのである。

ここで「寄殷協律」の詩の表現をもう一度思い起こしてみたい。その第一句、「五歳優遊同過日」の表現は、「優遊」の語を用いている點で「祭崔相國文」と同じであり、「同過日」というのも、「祭崔相國文」にいう「攜手」と同じ趣である。また、その第二句に、「一朝消散似浮雲」というのも、祭文にいう「嗚呼、易失者時」の無常の嘆きに通ずるであろう。そのように、はかなく失われた時を回顧して、祭文では「雪夜」「花朝」「春晩」「月高（月の高きとき）」を擧げていたが、その中、自然の景物として指摘できるのは、雪、月、花である。

自然そのものは際限なく循環するには相違ない。しかし考えてみれば、一たん人事と深い關りを持った風物は、その時限りのものである。賞玩の度合いが深ければ深いほど、その對象となった風物は、共に遊んだ人々との思い出につながるであろう。だからこそ白居易は、「寄殷協律」の詩の中でも、「一朝消散似浮雲……雪月花時最憶君」と歌って、無常の思いにかられ深い懷舊の情にひたっているのであろう。

かつて劉廷芝は「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同。」と歌って人の世の無常を嘆いた。またすでに、梁の沈約も、「去秋三五月、今秋還照梁。今春蘭蕙草、來春復吐芳。悲哉人道異、一謝永銷亡。」（「悼亡」『古詩紀』梁巻一〇）と歌って、人のみは永遠であり得ないという。

しかし白居易は、「眞娘墓」と題する詩の中で、

脂膚冀手不牢固　脂膚冀手　牢固ならず
世間尤物難留連　世間の尤物　留連し難し
難留連、易消歇　留連し難く、消歇し易し
塞北花、江南雪　塞北の花、江南の雪

（『白香山詩集』巻一二）

と歌い、この世の中ですぐれたものこそ消え易くはかないもので、塞北の花も江南の雪も例外ではないという。この詩は、作者が五十四、五歳のころの作品であるが、ここに、人人にもてはやされた風物もまた人間と同様に無常であるとする彼の自然觀がうかがわれる。

また、「月」についても、白居易は、

毎夜坐禪觀水月。　毎夜坐禪して　水月を觀
有時行醉翫風花　時有りて行醉して　風花を翫ぶ
（「早服雲母散」同後集卷一二）

笙歌縹緲虛空裏　笙歌縹緲たり　虛空の裏
風月依稀夢想間　風月依稀たり　夢想の間
（「送姚杭州赴任、因思舊遊、二首、其一」同後集卷一三）

と歌う。前の例の詩句中に見える「水月」は、「毎夜坐禪して」といっているところから考えると、白居易が愛讀した佛典の一つで、禪宗で尊重される『楞伽經』の文に基づくものであろうか。その卷第一に

觀一切法、皆無自性。如空中雲、如旋火輪、如乾闥婆城、如幻如焰、如水中月、如夢所見、不離自心。

とある。白居易の詩句にいう「水月」とは、水中の月の意である。それは、夢幻の間にある實體のないものを指していったもので[7]、白居易は坐禪によって一切空であることを悟ったといいたいのであろう。

また、その後に掲げた「風月依稀夢想間」という詩句も、いかに人々がもてはやす清風明月といえどもまた夢幻的なものであると彼は見ていることがうかがえる。

一般的には、季節の異なる自然的景物、雪、月、花が同時には存し得ない。それをひとまとまりの語として表現が可能になるのは、夢幻的な世界においてではないか。前にも考察したように、「雪月花」の表現の背後には無常感がただよっていた。白居易にとって、人人がもてはやす「雪月花」は、人事のイメージと濃厚に重複する。

考えてみれば、中國の詩の傳統は、自然描寫の中にも人事を歌い込むのが、より一般的であった[8]。白居易もまた、「雪月花」というひとまとまりの取り合わせの表現の中に、有爲轉變窮まりない夢幻的な人生の姿を見ていたのではなかったか。それは、單なる自然美の代表的存在としてだけの雪・月・花では、もはやない。消滅しやすい雪月花を前にして、移ろいやすい時間の中で、五十七歳の白居易は今、江南の風物を共に樂しんだ殷氏の追憶に浸りつつ、「雪月花時最憶君」と歌ったのであった。美しかった江南の風物と、樂しく過した交遊とが、まさに過去の夢と消え果てたことを思えば、現在の風物もまた、自己を含めて夢幻的な存在でしかあり得ないのだと、改めて觀じたものであったろう。

もっとも、永遠の存在と一般に見られるものですら、はかないと歌う「古墓犂爲田、松柏摧爲薪。」（古詩十九首『文選』卷二九）のごとき例がある。まして、個々の雪、月、花をそれぞれ消滅し易いものとみる思想は、次に掲げるように白居易以前にもあった。

時無重至　時は重ねて至ること無く
華不再陽　華は再びは陽かず
（陸機「短歌行」『文選』卷二八）

嘉卉亮有觀　嘉卉は　亮に觀有り
顧此難久耽　顧ふに此は　久しくは耽り難し
（張翰「雜詩」同卷二九）

明明雲閒月。　明明たる　雲閒の月
灼灼葉中花。　灼灼たる　葉中の花
豈無一時好　豈に一時の好しきこと無からんや
不久當如何　久しからざるを　當に如何すべき
（陶潛「擬古詩」同卷三〇）

雪花無有薄　雪花　薄有ること無く
氷鏡不安臺　氷鏡　臺に安んぜず

（簡文帝「玄圃寒夕」『古詩紀』梁卷五）

白居易が、これらの詩句を念頭においていたかどうかは、必ずしも明らかではない。しかし、白居易が「雪月花」をはかないものとして總括するには不自然ではない背景が、すでにあったものとして理解できるであろう。

白居易が、「雪月花」の時に舊友を懷慕する詩を作ったのは、ひとり殷協律に寄せた詩を作ったときばかりではなかった。

「遊山弄水攜詩卷　看月尋花把酒盃　六事盡思君作伴　幾時歸到洛陽來」　山に遊び水を弄して　詩卷を攜へ　月を看花を尋ねて　酒盃を把る　六事盡く思ふ　君の伴と作らんことを　幾時か歸り到って　洛陽に來たらん

（「憶晦叔」同後集卷一一）

雪夜閒遊多秉燭　雪夜には閒遊して　多く燭を秉り
花時暫出亦提壺　花時には暫らく出づるも　また壺を提ぐ
別來少遇新詩敵　別れてよりこのかた　新詩の敵に遇ふこと少に
老去難逢舊飲徒　老去って　舊飲の徒に逢ひ難し

（「早春醉吟、寄太原令狐相公・蘇州劉郎中」同後集卷一二）

前に掲げた「憶晦叔」と題する七絕は、太和六年（八三二）、作者六十一歲の時の作品である。轉句にいう「六事」とは、前二句の「遊山」「弄水」「攜詩卷」「看月」「尋花」「把酒盃」の六つのことをいう。從って、この轉句の意味は、そのような風流韻事の遊びの折りには、いつも君が相手になってほしいと思う、ということである。

この作品では、必ずしも「月」「花」のみを取りたてて强調しているわけではないが、「月を看、花を尋ねる」ような時にも、洛陽にいる晦叔を思って、早く歸って來てほしいと願望していることは間違いない。

また、後に掲げたのは、「早春醉吟、寄太原令狐相公・蘇州劉郎中」と題する七律の首聯と頷聯で、太和七年（八三二）、作者六十二歲の時の作品である。首聯で、「雪夜」「花時」における作者の現在の遊宴のさまを敍し、頷聯で、諸君と別れて以來、最近では新しい詩の相手も古い飲み仲間もいなくなったと述べる。ここでは、白居易は人戀しい感情を露骨には直敍しないが、題にいう「令狐相公」、すなわち同中書門下平章事の令狐楚や、「楚州劉郎中」、すなわち蘇州刺史の劉禹錫たちとのかつての交遊を懷かしんでいるものである。

これらの詩句においても、白居易は、月を看、花を尋ねる時、或は雪の夜などに、舊友を慕って人戀しい氣分になっていることがうかがえるのである。それはあながち、好時節を舊友と共に過したいとする、單純な願望や回顧の情等によるものとばかりはいい切れない。それは、前にも述べたように、季節と共に推移するはかなくも美しい自然を眺め、ふと觸發された、人生を無常と觀ずる思いが、感傷的な回顧の情や舊友がいてくれたらという願望と結びついたものであろう。

白居易における「雪月花」の表現は、偶然にして成立したものではない。「雪月花時最憶君」の句は、その前の「琴詩酒伴皆拋我」の句と對をなす。とりわけ「琴詩酒」と「雪月花」との對は、人事と自然との對偶關係として把握することができる。しかし、この「雪月花」に象徵される自然は、人事と關りを持った、美しくも移ろい易い自然として白居易は見ていたと思われるのである。

人事と自然との對比、それは古來、有限と無限、無常なるものと永遠なるものなどといった對比的感覺をもって、しばしば詩に歌われて

きた。たとえば、李白の「把酒問月」と題する詩の中の

今人不見古時月　今人は見ず　古時の月
今月曾經照古人　今月は曾(かつ)經て　古人を照らせり

などは、その最もよい例の一つであろう。しかし、五十七歳の白居易にあっては、美しいが故に人間に賞玩される自然（雪月花）もまた人間同様に無常なる存在として意識されたのであった。そして、それらの有する美は無常なるが故に一そう増幅して感得されるという側面もあったであろう。白居易が美的な自然的景物に興趣を抱く心情の根底の一つには、そうした自然觀も存したものと思われる。

人生を無常と觀じても、それがそのまま佛教的な悟道の境地に至るものでないことはいうまでもない。

白居易が、「雪月花」の表現に無常的感情を含ませたものとするなら、それは、中國文學史上、漢代以降において特に顯著になりはじめる人生無常の悲哀感と、魏晉のころより現れはじめるいわゆる佛教的無常觀とのいずれにより多く傾斜するものであろうか。白居易は、晩年には急速度に佛教思想に傾倒していく。それは、「雪月花」の表現の成立とはどのように關連するのであろうか。その點を考察する意味で、白居易が浮世を夢幻と觀ずるようになったのは、いつごろからであるのか、佛教的なものと關連する詩句を主な資料として、次に考えてみたい。

五

白居易が佛教に關心を持ったことを示す、恐らくは最も早い作品と思われるのは、「感芍藥花、寄正一上人」と題する詩である。この詩は、作者が十六歳から二十九歳にかけての間の成立とされている。芍藥の花の壽命が短いのに感じた作者は、この詩の中で、

空門此去幾多地　空門此より去ること　幾多の地ぞ
欲把殘花問上人　殘花を把りて上人に問はんと欲す

（「感芍藥花、寄正一上人」汪立名本『白香山詩集』卷一三）

のごとく、佛門に歸依したいと思うけれども、佛門はここからどれほど遠いところにあるのだろうか、芍藥の殘花を手にとって、正一上人に聞いてみようと思う、と歌っている。

ところが、四十歳前後のころになると、

人間此病治無藥　人間此の病　治むるに藥無し
唯有楞伽四卷經　唯だ楞伽四卷の經有るのみ

（「見元九悼亡詩、因以此寄」同卷一四）39歳

といって、妻に先立たれた元稹の傷心を、『楞伽經』だけが治してくれるものだから是非讀むようにと勸めて慰める作品が現れ、さらに、

自我學心法　我が心法を學びしより
萬緣成一空　萬緣　一空と成る

（「夢裴相公」同卷一〇）43歳

千藥萬方治不得　千藥萬方も　治め得ず
唯應閉目學頭陀　唯だ應に目を閉ぢて　頭陀を學ぶべし

（「眼暗」同卷一四）43歳

賴學禪門非想定　賴ひに禪門の非想定を學び
千愁萬念一時空　千愁萬念　一時に空し

（「晏坐閒吟」同卷一五）44歳

爲學空門平等法　空門平等の法を學ぶが爲に
先齊老少死生心　先づ老少死生の心を齊しうす

（「歲暮道情、二首、其一」同卷一五）44歳

賴學空王治苦法　賴ひに空王治苦の法を學ぶ
須拋煩惱入頭陀　須らく煩惱を拋てて　頭陀に入るべし
（「自到潯陽、生三女子、因詮眞理、用遣妄懷」同巻一七）47歳

などのように、積極的に佛法を學ぶ姿を歌った詩句が、急速に増加する。

しかし、白居易は、精神的安住の地を佛教の世界にのみ求めようとしたのではなかった。次に掲げる詩句が示すように、他面、道家の思想によって安心立命の境地を得ようとする傾向もまた、四十歳代の作品にはうかがわれるのである。

「去國辭家謫異方　國を去り家を辭して　異方に謫せらる
中心自怪少憂傷　中心自ら怪しむ　憂傷少きを
爲尋莊子知歸處　莊子を尋ねて歸處を知り
認得無何是本鄉」　無何は是れ本鄉なるを認め得たるが爲なり
（「讀莊子」同巻一五）44歳

不開莊老卷　莊老の卷を開かずんば
欲與何人言　何人と言はんと欲する
（「早春」同巻七）45～46歳

とりわけ、作者四十五、六歳ごろの作品とされている「睡起晏坐」（巻七）と題する詩には、

行禪與坐忘　行禪と坐忘と
同歸無異路　歸を同じくして　路を異にすること無し

と歌う。このように、當時はまだ、特に佛教へのみ傾斜するという心境ではなかった。四十四歳のときに江州司馬に貶せられた白居易は、風光明媚な廬山に草堂を營んだ。堂中には、木榻四、素屏二、漆琴一張の他に、「儒・道・佛の書各兩三卷」を備えたという（「草堂記」『白氏文集』巻四三）。これは、白居易が當時、佛教に關心を有し、東林寺、西林寺の僧と親交を結んでいたとはいうものの、思想的には佛教以外のものにも關心が向けられていることを端的に物語っている。そして、そのころ、佛道修行に勵んでいるときでも、容易に悟道に至り得ない惱みを次のように歌っている。

自我向道來　我の道に向かひてよりこのかた
于今六七年　今に　六七年なり
鍊成不二性　不二の性を鍊成して
消盡千萬緣　消盡す　千萬の緣
唯有恩愛火　唯だ恩愛の火有って
往往猶熬煎　往往　猶ほ熬煎す
豈是藥無効　豈に是れ　藥も効無からんや
病多難盡蠲　病多くして盡くは蠲き難し
（「夜雨有念」同巻一〇）43歳

不覺定中微念起　覺えず　定中微念起こり
明朝更問鴈門師　明朝更に問ふ　鴈門の師
（「正月十月夜、東林寺學禪、云云、因呈智禪師」同巻一六）46歳

空王百法學未得　空王の百法　學ぶも未だ得ず
（「醉吟二首其一」同巻一七）47歳

そして、次に掲げるように、白居易の四十代には、酒や詩、ひいては神仙への志向もまた斷てないでいる。

若不坐禪銷妄想　若し坐禪して妄想を銷さずんば
卽須吟醉放狂歌　卽ちに須らく吟醉して狂歌を放にせん
（「强酒」同巻一五）44歳

「自從苦學空門法　苦だ空門の法を學びしより

銷盡平生種種心　銷盡す平生種種の心
唯有詩魔降未得　唯だ詩魔のみ有りて　降すこと未だ得ず
每逢風月一閒吟」　風月に逢ふ每に　一たび閒吟す
（「閒吟」同巻一六）46歳

從此神仙學得否　此れより神仙　學び得るや否や
白鬚雖有未爲多　白鬚有りと雖も　未だ多しと爲さず
（「問韋山人甫」同巻一七）47歳

こうした傾向は、五十歳代の前半もほぼ持續するが、五十七、八歳のころから、

有起皆因滅　有の起こるは　皆滅に因る
無暎不暫同　無は暎いて　暫くも同じからず
從歡終作慼　從歡も　終には慼と作り
轉苦又成空　轉苦も　また空と成す
（「觀幻」同後集巻九）57歳

幻世春來夢　幻世　春來の夢
浮生水上漚　浮生　水上の漚
（「想東遊五十韻並序」同後集巻九）58歳

などのように、現世を夢幻と觀ずる作品が現れる。これらはいずれも佛教的な思想や事物を背景とした詩句である。最後の「想東遊五十韻」と題する長編の詩は、かつての東遊を回顧した作品で、ここに掲げた詩句は、訪れた寺の様子や僧との談笑獻酬のことを描寫した後に述べられているものである。もっとも、これより先、元稹の同題の詩にならった「生去死來都是幻」（「放言五首」四十四歳）、或は「幻世如泡影」（「對酒」四十七歳）などの詩句があるが、これらの表現が果たして佛教的な背景を直接有するものであるのかどうか、今急には定かになし得ない。[9]

とにかく、白居易が「雪月花時最憶君」と歌った五十七歳という時期は、佛教的無常觀によって人生を夢幻と觀じている時期であることが明確にうかがえるであろう。この時期に現れた「雪月花」の表現は、やはり人生を無常と觀ずる佛教的自覺のもとに成立したと思えるのである。

結　語

白居易が「雪月花」を一まとまりの取り合わせの詩語として意圖的に表現し得たのは、四季の風物の中、最も美しかるべきものとして、雪、月、花を賞玩しようとする唐代詩人達の情趣的志向に基づくものがあったからである。また、白居易自身、雪、月、花という自然的風物に特別の關心を寄せ、自然美の代表的存在として象徴的に詠出したと同時に、有限の人事との關わりの上で、それらを消滅し易い存在と見なし、佛教的な無常觀の自覺のもとに「雪月花時最憶君」と歌ったものであったろう。いわばその時期における白居易は、自然を人事と對立したものとしてとらえてはいない。人間と密接な關係を持ってしまった自然は、もはや永遠なるものではあり得ず、人間同様に、はかないものとして白居易の眼には映っている。このような自然は、人間にとって極めて卑近な存在であり、感興を覺えやすい親しむべき對象として認識されるであろう。白居易の詩句が我が國の文人に受容されやすかったのは、彼のこうした自然に對する態度にも一因があったものと思われる。白居易におけるこのような自然觀の詳細については、後日、また稿を改めて考えてみたい。

注(1) 諸橋轍次先生の『大漢和辭典』、小學館の『日本國語大辭典』などには、熟語として「雪月花」を採錄する。また、『故事熟語大辭典』（池田四郎次郎著。大正二年十月、寶文館刊）には、「雪月花」の出典（同書では「出處」という）として、『白氏文集』の「雪月花時最憶君」を掲げる。なお、『現代漢語詞典』（中國科學院語言研究所詞典編輯室編。一九七七年十一月、商務印書館刊）には、「風花雪月」の語を載せるが用例は掲げない。また、『漢語拼音詞匯』〈增訂稿〉（中國文字改革委員會詞匯小組編。一九六四年七月、文字改革出版社刊）にも「風花雪月」の語を載せる。相原茂氏の御示敎によれば、風の字を加えて四字にして安定させたいという意識が働いているのであろうし、語順も fēng huā xuè yuè と、一聲、一聲、三聲、四聲となるのが最も安定しているのではないかといわれる。『大漢和辭典』の「風花雪月」の項には、晩唐の鄭谷の「府中寓止寄趙大諫」と題する五律の尾聯、「雪風花月好、中夜便招延」の用例を掲げる。しかし、語順が「風花雪月」となっているそのものの用例や、その類例は、白居易以前の詩において、未だ管見に入らない。また、『月雪花』（芳賀矢一著。明治四十二年九月、文會堂書店刊）の前言には、白居易の「雪月花時最憶君」を引き、中國では、雪月花というが、我が國では月雪花という旨をその冒頭に述べている。

(2) 宮地敦子氏は、『和漢朗詠集』所收の白詩に基づく「漢語『雪月花』の受容は、平安朝であり、日本語への定着は江戸期であろうと推測」（「雪月花の受容」『國語と國文學』昭和四十九年八月號）しておられる。

(3) 作品の成立年代は、花房英樹著『白氏文集の批判的研究』（昭和四十九年七月再版、朋友書店刊）による。以下同じ。

(4) 柿村重松著『和漢朗詠集考證』（大正十五年四月、目黑書店刊）卷下、三一〇ページ。田中克己著『白樂天』（昭和三十九年六月、集英社刊。漢詩大系第十二卷）三二四ページなど。

(5) 小尾郊一著『中國文學に現われた自然と自然觀』（昭和三十七年十一月、岩波書店刊）第二章第六節。

(6) 『新唐書』藝文志。

(7) 梁の簡文帝に、「十空」という現存六首の詩（『古詩紀』梁卷五所收）があって、如幻、如響、如夢、如影、鏡象などと共に、水月と題する五言十句の作品がある。

(8) 小尾郊一博士は、後世とかく艶麗浮薄と評される宮體詩でも、「自然から觸發されて人間のことが浮んでくるのか、人間のことを歌おうとして自然を利用するのか、作者の眞意は判然としないが、とにかく詩人の心の奥には、自然と人間との關係において人生を考える考え方が存在していたことは否めない」（「中國中世文學研究」第九號、一九七三年七月）と述べておられる。

(9) それらの詩句の場合、白居易が敬慕してやまなかった陶淵明の詩句などによったものか、直接に佛典の影響を受けたものか檢討の餘地がある。鈴木修次稿「陶淵明『人生似幻化、終當歸空無』について」（東京敎育大學漢文學會『漢文學會々報』第三十二號、昭和四十八年六月）參照。

〔付記〕 本稿をなすに當たって、特に鎌田正博士、加賀榮治博士、鈴木修次博士の三先生に御敎示を賜りましたことを記して、厚く御禮申し上げます。また、成稿後に、小尾郊一博士の御校閲を仰ぎ御指導頂きましたことも記して深謝の意を表します。